

# 一周忌特集号の発刊にあたって

飯 沼 賢 司

平成十年一月十五日、渡辺澄夫先生の一周忌にあたり、追悼特集号を発刊する。この特集は、渡辺先生の葬儀直後に多くの方の強いご要望により計画された追悼特集の二号目にあたる。昨年三月に多くの地方史に関係した人や先生とご関係をもった方々にご寄稿をご依頼したところ、渡辺先生とともに『大分県地方史』を育ててきた方々やそこで育ってきた方々が多くの論考を寄せてくださった。まだ、寄稿の予定の方々が多くおられると聞いていたが、期日もあり、九篇の論考をもって追悼号を組ませていただいたが、それでも一五〇ページ近い立派な特集を組むことができた。ここに謹んで先生の御霊に特集を捧げた。

論文は、古代から近代に及び、これまでの地方史の研究を踏まえ、それを一段と飛躍させるものである。最初の緒方英夫氏は、会社を定年後、別府大学で渡辺澄夫先生に師事し、古代・中世の研究を進めており、今回の論文でも実証を重んじる渡辺先生の学風を発展させている。西別府元日氏は現在広島大学で教鞭を執られているが、大分大学に奉職され、渡辺先生の下、地方史の発展に努めてきた。今回の論文では、渡辺先生の『豊後国荘園公領史料集成(下)』に示唆を受け、相撲人大蔵氏の実像に迫っている。

乙咩政巳氏は大分大学で渡辺先生に師事し、先生葬儀においても教え子の代表として弔辞を読まれた。渡辺先生の実証主義学風を最も忠実に受け継ぎ、中世の宇佐神宮研究を進めてきた。今回の論文「宇佐宮御家人智仁とその一族」もその研究の一環といえる。鹿毛敏夫氏は、先生の広島大学の後輩で、地方史二代目会長豊田寛三氏に大分大学大学院で教えを受けた。最近、

渡辺先生以来の研究課題であった戦国時代の太友氏の経済構造や府内や白杵などの戦国都市の研究を精力的に進めており、今回の論文「戦国大名太友氏の藏経営」でも太友氏研究の新しい方向を打ち出している。

橋本操六氏、佐藤満洋氏、吉田豊治氏は、地方史発足の初期の段階から、渡辺先生とともにその発展に尽力してきた人物である。この三氏が最も頻繁に地方史に論文を載せられており、いち早く原稿を寄せられ、特集にあたっては早稲田大学教育学部で教鞭を執られており、戦国末から近世を中心に研究を進められ、遠方ながら、特集号にわざわざ原稿を寄せられた。大分県に止まらない広がりをもつのも渡辺先生の人徳と思われる。最後の長順一郎氏は、日田市在住の郷土史研究家であり、地道な日田地域での調査成果を寄せられた。

若い世代から、渡辺先生の年齢に近い方々まで、学会の第一線の研究者から地元の研究を熱心に進める人まで、大分県地方史研究会は幅広い人材を抱えている。これも渡辺先生の学風だと思われる。先生は地域での研究を大切にされると同時に学会の第一線のレベルを求められ、その飽くなき研究心は最後まで衰えなかった。地道な郷土から大きな歴史まですべてを包括するのが渡辺史学である。この特集はそのような渡辺史学の成果の結集にはかならない。先生の一周忌にあたり、我々地方史会員は改めてこの渡辺史学を意識し、その発展に貢献して行くことを誓いたい。

平成十年一月十五日